

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

文化資源としての創作物：
原住民族芸術をめぐる民族の関係性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野林, 厚志 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4905

文化資源としての創作物

——原住民族芸術をめぐる民族の関係性

野林厚志

抄録——本稿の目的は、台湾社会における原住民族に関わる創作物がおかれた状況を考えるきっかけをつくることである。台湾の原住民族芸術というと、タイヤル族の機織やパイワン族の木彫といった、一見「原住民族的」な作品を想像しがちである。一方で、彼らの創作活動を文化資源という観点でとらえることで、多様な民族間関係のなかに原住民族芸術は存在していることが理解できる。

Summary —— This paper tries to create an opportunity to think about the aboriginal art in Taiwan. It is easy to explain the aboriginal arts would be supported by the native peoples and they might make the wood curving or cloth weaving such as their typical crafts. We, however, could understand that it could occur in the relation between the different ethnic groups when we recognized their creating activities as a kind of the cultural resources.

はじめに

本稿の目的は、台湾社会における原住民族に関わる創作物がおかれた状況を考えるきっかけをつくることである。1990年代以降、台湾における原住民族の文化は、原住民族自身のアイデンティティの拠り所の一つとしてのみならず、台湾の民主化や大陸中国との関係において、台湾アイデンティティを示す役割も与えられてきたと言えるだろう。彼らの文化をめぐる営みが社会的な関心を引き起こす状況は近年、特に顕著となっている。世界の他の地域の先住民族の間でもこれに類した状況が見られる。例えば、窪田によれば、オーストラリアのアボリジニ美術が文化資源として位置づけられる背景には、オーストラリア国家、国際社会、そして作り手であるアボリジニという多様なアクターが存在し、美術市場での承認という国際社会の関与を経験したことによって、アボリジニ美術が彼らの文化の支えとなる文化資源から文化資本へとその姿をかえていったことが言及されている（窪田2007：199）。台湾の原住民族の創作物がオーストラリア・アボリジニの状況と異なるのは、作品の市場化が国際的にはそれほど進んでいないという点であろう。

一方で、台湾内における原住民族の創作活動の幅は広がりを続けている。いわゆる伝統的な手工芸である機織や木彫、製陶に加えて、絵画製作やインスタレーションを行なう原住民族の人々も増えてきた。彼らは原住民作家や原住民芸術家とよばれ、作品の展示会が開催されたり（台東県政府2006）、関連した書籍の出版も目立つようになってきている（廬2007等）。そうしたなかで、登場したある一人の人物の創作活動を通して、台湾における原住民芸術とは何かという問題を考えていく端緒となる考察を行ないたい。自ら看板職人と称する丁枝尾氏の作品は、原住民族の集落や関連する施設を装飾するものとして現地の社会に受容されていた。一方で、その人物は平地漢族出身の男性であった。原住民族ではない人間が創作する作品が原住民族文化にとってどのような位置づけにあるのかについて、彼の履歴や作品を紹介しながら考えてみたい。

1. 台湾原住民族と物質文化

台湾の原住民族は台湾に先住してきたオーストロネシア系の民族諸集団のことをさす（写真1）。歴代の中国王朝は彼らのことを番族と称し、日本統治時代の後半には高砂族という名称でよばれていた。第二次大戦後の中華民国時代には、山胞（山地山胞、平地山胞等）とよばれ、

現在では原住民族という名称が公的に用いられている。日本統治時代には、同化、教化すべき対象とみなされ、中華民国時代には台湾の経済成長にともなう経済格差のなかで、社会のなかでも劣位にあり、さまざまな差別の対象ともなってきた。彼らの社会的地位に変化が見え始めたのは、1980年代にはじまった原住民運動とよばれる社会運動をきっかけにして、原住民族の権利促進が社会の中で訴えられるようになってからである。以後、憲法改正によって原住民族の権利や生活の保障、文化の振興が約束されて以降、様々な法律や制度が整備され、原住民族の台湾社会の中における立ち位置は大きく変っていった。

原住民族の物質文化は、19世紀の後半から台湾にやってきた宣教師や研究者による関心を集めていった。彼らにとって、原住民族の人々が使用していた道具や創作物は、未開の民の珍しいものであると同時に、民族学や人類学といった学問分野における学術資料としての扱いを受けていた。19世紀後半から20世紀初頭にかけて布教活動を行なったカナダのマッケイ博士、日本の研究者である鳥居龍蔵や馬淵東一、鹿野忠雄、瀬川幸吉らはこうした観点から原住民族の道具や創作物を収集していった。

日本統治時代における原住民族の創作物は、こうした物質文化研究の対象であったり、珍品、奇品として扱われたりするのは別に、原住民族への授産事業の対象ともなっていた。とりわけ、織物や木彫、竹、籐細工の製作については、各地に工芸指導所が開設され、日本の内地から指導者が派遣されることもあった。たとえば、高雄州に大正10年に設立されたアマワン工芸指導所では、木工や手芸が教授されたことが知られている（鈴木1935、写真2）。こうして作られた手工芸品は、原住民族の工芸品として商品化もされていた。台北にあった生蕃屋に代表されるように、こういった原住民族関連商品を売る専門店も当時存在していたようである。

第二次大戦後は台湾の研究者やコレクターが彼らの道具を求めようになり、特に市井の収集家による原住民族の、比較的古い資料の収集、購入がなされていった。一方で、原住民族の人々は、台湾に著しい経済成長にともなう生活形態の変化のなかでも、ものを作る行為を規模を小さくしながらも継続していった。おみやげ物やちょっとした工芸品の製作に一部の原住民族の人々が従事していった。そうした人々の中から、原住民作家もしくは原住民芸術家とよばれる人たちが出てきた。彼らの多くは自分自身の属する民族集団のモチーフを用いた作品を作ることが多く、製作したものや表象されたものと製作者との間には民族集団の対応関係が読み取れるものが多かった。

2. 丁枝尾氏の経歴

筆者と丁枝尾氏との出会いは10年ほど前に遡る。筆者は博士論文のもとになった調査をパイワン族の集落の一つである、台東県達人郷土坂村で行っていた。丁氏は、筆者が住まわせていただいた家の主人である黄健有氏の弟、黄健生氏の長女の夫である。



写真1 盛装したパイワン族の人々。パイワン族は木彫や壮麗な衣服製作に長じていることで有名である。(2008年、筆者撮影)



写真2 日本統治時代の原住民族の工芸品（鈴木1935より）

丁氏は1962年、台東県の海岸沿いに位置する大武で生まれた。平地漢族の家庭に生まれ育ち、中学校卒業までを大武で過ごした。大武郷は原住民族の人々も居住はしているものの、丁氏の育った環境は基本的には平地漢族社会であり、身につけた習慣等は基本的に平地漢族のものであった。地元の国民中学校を卒業した後、就職のために台北に移り住んだ。当時の台湾では中学校を卒業すると、台北や高雄などに出て、工場や会社などに住み込みで働く者も少なくなかった。技術職や商売に関連した職種に就く場合が多く、オートバイや自動車の修理工、食堂の調理人といった「手に職をつける」類の就職である。多様な職種があるなかで、丁氏の選んだのは看板製作業であった。当時、台湾では映画が非常に流行しており、映画館には決まって封切された作品の看板絵が掲げられていた。丁氏はもともと絵を描くのが好きだったことも手伝い、看板製作業の親方に弟子入りし、看板製作業を開始した。当時、こうした職業の大半は徒弟制がとられており、見習い期間中は給料の支給はなく、丁氏の場合は1ヶ月の生活費として300元ほどが支給されていた。

丁氏は18歳を過ぎてから、一人で仕事を任されるようになり、給料も支給されるようになった。途中2年間の兵役につき、兵役終了後も同じ会社にもどり勤務を続けた。26歳で独立し、台北県の三重市に自らのオフィスを開設した。独立してからはホテルやゴルフ場の内装、教会の壁絵、一般家庭の内装を手がけるようになった。パイワン族の妻とも台北在住時代に結婚した。

丁氏の仕事の内容に転機が訪れたのが行政院原住民委員会からの仕事の依頼であった。行政院原住民委員会とは、日本の内閣にあたる行政院に1996年に設置された原住民族関連の政策を担当する部署である。日本では庁にあたる位置づけと考えてよい。丁氏は原住民委員会のスタッフから、原住民委員会の事務所を開設するにあたり、内部に飾る絵を描いてほしいという依頼を受けた。依頼をしたスタッフは丁氏を原住民族であると思いこんでいての依頼だったらしく、丁氏は原住民委員会側に自分は原住民族ではないと伝えた。原住民委員会でもどのようなやりとりがあったのかについての詳細はわからないが、先方からは問題ないという回答を受けたので、作品製作にとりかかったという経緯があった。この仕事をきっかけにして、原住民族をモチーフにした油絵も描くようになったという。

2001年ごろから台東での仕事を受けるようになり、実家が所在する達仁郷の集落の絵画を描いてほしいという仕事の依頼をきっかけに、台北の事務所を閉鎖し台東に仕事の拠点を移した。仕事の中心を台北から台東に移した理由については、台北の景気が悪くなり、仕事のわりがあわなくなったこと、台東を中心にして原住民族関係の仕事の依頼が増えたので、台東で事務所を持つほうが便利だということ、さらに妻の両親が死去し、妻の実家に誰も住まなくなってしまったことを丁氏はあげていた。妻は長女であり、実家を守っていく必要があるということも丁氏は強く意識していた。これは性別に拘らず長子相続を基本とするパイワン族の家族制度にしたがっているとも言える。

現在、丁氏は台東市内に事務所を構えている。台北の仕事は大規模なもの場合は受注し、昔からの顧客から依頼を受けたときも出張して仕事を行っていた。台北における仕事の依頼は商業施設等における一般的な壁絵が大半であった。一方で、台東で依頼を受ける仕事の大半は公共施設における絵画の描画やレリーフ、時には彫像の作成であった。その大半は原住民族関連の仕事である。これには、政府が進めている原住民族部落美化運動も強く影響していた。

3. 丁氏の創作活動

丁氏は筆者とのやりとりの中で、自分が芸術家や画家という立場で描いているのではないということを繰り返し述べていた。言葉をあえて選ぶとすれば「画匠」であろう、職人というほうがふさわしいかもしれないとも述べており、自分の制作したものに必ずしも満足はしておらず、まだまだ、技術を磨く必要があるとも考えていた。

自分自身が平地漢族であるにも拘らず、原住民族をモチーフにした絵画をもっぱら手がけるようになったことについては、「こうした仕事を依頼された当初は非常にとまどったことを覚えている。台北での仕事や、台東の商業施設の仕事は肖像や日常的な光景が多かったが、原住民族関連の仕事の場合は、神話や奇譚を絵に仕上げなければならないことが多く、その内容が

よく理解できずに、精神的に非常に疲労した。妻や親戚にも協力してもらいながら、なるべくそれらの物語の意味を咀嚼するように努めてきた。」と正直な気持ちを伝えてくれた。

丁氏の仕事の進め方については、特に原住民族関連の仕事の依頼があった場合は、おおむね次のように仕事を進めていた。

先方のおおまかなイメージを依頼内容から把握する。次にそれに関連した資料を収集する。原住民族委員会の出版物を調べたり、村の古老、首長を相手に自ら聞き取りを行ないながら、資料収集を行なうことも少なくない。こうした資料をもとに作品の内容をかため下絵を作成する。絵の図案やイメージは自分がデザインすることが多いが、先方から具体的な図案を渡されることもある。下絵がかたまったら、依頼主にその内容を確認する。依頼主から問題ないという回答を得たら、実際の作品製作にとりかかる。作品の内容については基本的には先方の意図を尊重する。自分のイメージやアイデアを相手に押しつけることはしない。

作業の過程では、依頼主やその周囲の人々としばしば意見が合わないこともある。これにも悩まされてきたという。例えば、ある村の移住史を描いたときは、県会議員から間違いを指摘され、作品の修正を何度も行なわなければならなかった。こんなこともあるので、実際の製作にとりかかるときには、発注者のみならず、関係者にも十分に確認をするようになった。

原住民族関連の絵画やモニュメントの製作依頼が今後増えていくかどうかははっきりとは予想できないが、全く無くなるとは考えにくいと丁氏は考えていた。いずれにせよ、台東を拠点としながら、今後も創作活動を続けていくつもりであるとしていた。また、自分が絵画というジャンルを選んだことの利点も丁氏は意識していた。原住民族の集落や関連施設において似たような仕事をしている人はいるが、その大半は彫刻製作であり、自分のように絵画を描く者は少ないことから、仕事の上では有利だろうと考えていた。

4. 丁氏の作品

先述のような過程をへながら丁氏が手がけてきた作品のいくつかを紹介しよう。

(1) 台坂村、土坂村出入口のモニュメント

丁氏の妻の実家がある土坂村とその隣にある台坂村の入り口の部分に、巨大なゲート状のモニュメントが建てられている。柱には盛装したパイワン族の男女が掘り込まれたもので、いずれも丁氏の手による作品である。これは達仁郷からの依頼で製作したものである。パイワン族の集落内外には人型をかたどったモニュメントがたてられることが以前から知られている。それらの大半は石彫であったり、石板を彫りこんで作られたものであった(写真3)。丁氏の作品においてモデルとなっているのは自分の友人であり、身近な人物が描かれていた。台坂のモニュメントでは、女性がつアワ、男性がかつぐイノシシ、ゲートの上方には、太陽、イノシシの下顎犬歯の飾り、女性壺、ヒャッポダがあしらわれた男性壺といったパイワン族に典型的な物質文化が表現されていた。パイワン族の祖先創出の神話に必ずと言ってよいほど出てくるのが、太陽とヒャッポダと壺であり、このモニュメントはパイワン族の創生神話がかなり強く意識されていたと言ってよいだろう。一方で、土坂のモニュメントにはサワガニのモチーフが用いられていた(写真4)。これはかつてのパイワン族の彫刻のモチーフにはほとんど登場しなかったものである。これには、最近になって、土坂村において、観光資源としてサワガニが扱われるようになったことが背景としてあった。

(2) 台東市内の原住民族料理のレストランの壁絵

台東市内に開店している原住民族料理店の内部に丁氏による5張の絵画が飾られている。壁面を覆う大きさのもので、縦横が数メートルにおよぶ巨大な絵画である。この絵画はこの店の店主が台北の原住民族委員会の事務所に飾られていた丁氏の絵画を見て、気に入ったことから丁氏に依頼して作成してもらったものである。絵画のそれぞれのモチーフはパイワン族の盛装した男女、民族衣装に身をつつんだブユマ族の若い男女の集い、民族衣装のアミ族の男女(写真5)、民族衣装で盛装した女性、アワを収穫する女性(写真6)である。レストランの名前は



写真3 かつてのバイワン族の集落に設置された石彫（鹿野 1946：図版23）



写真4 現在のバイワン族の集落の入口に立てられたゲート（2008年、筆者撮影）

アミ族の言葉で収穫を意味する mipanai であり、いずれも豊年祭での盛装や収穫といったテーマが表現されていた。それぞれの絵画には、黒人という言葉と丁枝尾という署名が施され、日付は2003年3月となっていた。興味深いことは、筆者が2008年9月にこの店を訪れ、店主に聞き取りを行なった時点で彼は丁氏のことを原住民族であると思いこんでいたことである。さらに、その認識は丁氏自身についてではなく、彼に原住民族の配偶者がいるということを根拠としていたのであった。

5. 文化資源としての創作物に見られる民族の関係性

丁氏の作品を原住民族芸術ととらえるかどうかについては様々な議論があるだろう。また、台湾における工芸と芸術との関係や、原住民族にとっての創作活動の歴史的な経緯についても詳しく検証しなければ、原住民族芸術の議論そのものもあまり実りのあるものにはならない。限られた紙数のなかで、ここでは、丁氏の作品が土地の人々に受容されてきた理由を筆者なりに考察することにする。

丁氏が原住民族に関連した創作活動を行なう場合のメディアは絵画と壁レリーフであった。絵画はもともと丁氏が営んでいた看板業に由来するものであり、壁レリーフは原住民族の人々、とりわけ台東県を中心に集住してきたバイワン族の人々が家屋や集落内部に慣習的に製作してきたものである。

丁氏の創作活動が原住民族の人々にとってはそれほど身近ではない絵画から出発したということは、丁氏の作品が原住民族の人々に受容されていく要因の一つになっていた可能性はあるだろう。絵画を手がける原住民族の人はこれまでにそれほど多くはいなかった。絵画、とりわけ写真画が機織や木彫とは対照的な表現方法として、原住民族社会の中に位置づけられてきたことは大いに考えられることである。すなわち、彼らの日常の中に絵画を描くという営みは必ずしも根づいてはいなかったということから、原住民族の文化を表象する手段を他者によって利用されているという意識を希薄にしたことにもつながっていた可能性はあるだろう。一方で、丁氏は壁レリーフという、とりわけバイワン族の人々にとっては、「バイワンらしさ」を自他ともに認めるメディアに入り込むことにも成功している（写真7）。これもやはり丁氏が絵画から出発し、土地での創作活動が受容されるという実績があるがゆえ可能となったとも考えることができる。もちろん、丁氏の妻がバイワン族出身であり、彼自身が土地の人間であるという認識は、彼をとりまく周囲の人間は多少なりとも持ち合わせていたと言えるが、それ以上に、メディアや創作手段の使われ方やその過程のありかたによって、その担い手たるアクターならびに表現される対象との間には様々な関係が生じることが読み取れるのである。別の言い方



写真5 台東の民族料理レストランに飾られている丁氏の作品（2008年、筆者撮影）



写真6 台東の民族料理レストランに飾られている丁氏の作品（2008年、筆者撮影）



写真7 金峰郷介達国民小学校外壁のレリーフ（2008年、筆者撮影）

をすれば、丁氏の創作する作品は彼自身の創作活動の過程を通して、土地の人々によって彼らの原住民族文化の一端をになう文化資源として認められていったとも言える。そして、それは丁氏とメディアとの関係が、原住民族とメディアとの関係にたいして齟齬をきたさない形で存在してきたからでもある。ここでいう文化資源とは、窪田の説明するところの、与えられた状況の改善に資するような物質または活動のことをさす（窪田2007:181）。丁氏の創作活動は、選択するメディアの種類とその過程において原住民族に受容されるものであると同時に、創作物そのものについても原住民族にとって有利なものとなっていたのである。ただし、そのことを丁氏が明確に意識していたとは必ずしも言えない。彼にとって、原住民族を描くということは当初、職人としての自分が受けた仕事にすぎなかった。また、原住民族の文化の一端を担うという意識は、彼が仕事を進めていく中で徐々に形成されていく可能性はあるだろうが、それがどの程度まで深化されていくかはいまだ予測はできない。

一方で、原住民族と非原住民族との間に、相互の排他性をともなわない文化資源の共有のありかたが生まれている過程が進行していることは間違いない。これは、もちろん、文化資源がこうした関係性を築くのに馴染んだ属性をもつだけでなく、パイワン族という特定の民族集団に見られる社会的な受容システムが影響している可能性も否定できない。許功明が、芸術という観念がそもそも原住民族の認識の中にあっただろうかということ問いかけているように（許2004:48-49）、原住民族の社会の中における工芸や芸術といった営為がどのような歴史的な背景で認識され営まれてきたかについても今後の議論は必要となる。

まとめ

限られた資料と紙数の制約のため、本稿では、現在の台湾原住民族の創作活動を部分的にし紹介することができなかった。台湾の原住民族芸術というと、タイヤル族の機織やパイワン族の木彫といった、一見「原住民族的」な作品を想像しがちである。確かにそうした創作活動を通じた自己表現や民族のアイデンティティの表象は今も盛んに行なわれている。一方で、彼らの創作活動を少し丁寧に見ていくことで、多様な民族間関係が交錯している状況が存在していることも理解できるであろう。台湾における原住民族芸術はそうした関係性のなかに存在しているのではないだろうか。

（のばやし あつし）

参考文献

- 窪田幸子「アボリジニ美術の変貌」『資源化する文化（資源人類学02）』（山下晋司編）、181-208頁、東京、弘文堂、2007
- 鹿野忠雄『東南亜細亞民族学先史学研究』東京、矢島書房、1946
- 鈴木秀夫編『台湾蕃界展望』台北、理蕃之友発行所、1935
- 陳伶燕編『台東県原住民工芸展』台東、台東県政府、2006
- 盧梅芬『台湾当代原住民族芸術発展』台北、芸術家出版社、2007
- 許功明『原住民芸術與博物館展示』台北、南天書局、2004